

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				備考	コメント
16 インガル 遠軽 (遠軽町)	町 駅	インカウシイ *インカルシ	inkar-us-i	臨眺する所 眺める・いつもする・所	西の山からの突出部が駅のすぐそばまで、目のくらむような直立の大岩壁(がんぼう岩)になって出ていて、その突端に展望所が見える。アイヌ時代はそこから見張りをしたものらしい。 {遠軽町見解も同説。}	永田 山田	A	
17 インハツ 遠別 (遠別町)	町 川	ウェンペツ	{ wen-pet }	悪い・川	{松浦氏は「魚類至って少なし」と書いている。}	駅名	B	- 「wen-pet」が自然な解と思われ。 ? -
		ウエベツ	{ ? }	二股の川	この河口が二筋だったため。	上原		
		ウイエペツ	u-ye-pet	相・話する・川	天塩山中のアイヌがここで海浜のアイヌと相話するのを楽しみとしていたため。	永田		
18 イン和 遠幌 (夕張市)	地区	ウェンホロカペツ	wen-horka-pet	悪い・後戻りする・川	何で悪かったのかは全く忘れられた。この辺の土地は、今はその川名を下略して遠幌町と呼ばれている。	山田	C	-
19 エンルム (様似町)	岬	エンルム	enrum	岬	様似川の川口東岸の所から島のような岬が海中に伸びていて、そこがエンルムと呼ばれていた。	山田	A	

【オ】

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				備考	コメント
1 オイマナエ 生花苗 セイカ 生花 (大樹町)	川	オイカオマイ	oika-oma-i	越えて入る (海波が)越え・入る・もの(沼)	この沼に高波が越えて入るため。 この辺に並んでいる海岸湖沼は、どれも砂で口が塞がり、シケの時は波がそれを越えて打ち込んだのだろう。沼の東側に繋がっている生花苗川はオイカマ・ナイ(オイカマイの・川)と呼ばれ、それが一般的に呼ばれるようになったものだろう。地名は一字略して音読みにしたものの。	上原 山田	B	- ? 他説も考えられる。
	地区							
2 オイワ 追分 (追分町)	町 駅	-	-	-	岩見沢に出る街道と夕張川筋に出る街道の追分(分岐点)であることから名付けられた純日本語地名。	山田	A	和名と思われる。
3 オム 雄武 (雄武町)	町	オムイ	{ o-mu-i }	川尻 ^{フサ} ・塞がる・所	暴風雨の時川尻が塞がる川だったため。	永田	B	- -
	川	オム	o-mu	川尻・塞がる	雄武川は流長 22 キロの川であるが、風や潮流で砂が川尻をふさぐことがあったのでこの名で呼ばれた。	山田		

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				備考	コメント
4 オアサ 大麻 (江別市)	地区 駅	-	-	-	明治 26 年入植者が麻を栽培したことから、同 39 年江別村大曲麻畑林地と名付けられ、昭和 10 年大麻となった。	駅名	A	和名と思われる。
5 オオカリハ 大狩部 (新冠町)	地区 駅	ヲフンカルシベ { オブンカラウシベ } *{ オブンカルシベ }	{ o-punkar-us-pe }	{ 川尻に・ブドウなどの蔓 ^{ツル} ・群生する・もの(川) }	その名義はブドウ、コクワ等が多くあったため名付けられたという。	松浦	B	-
6 オオキ 大岸 (豊浦町)	地区 駅	オプケシ	{ op-kes }	モリ 鋸・足 { 鋸・の末端 }	この海岸の形が、鋸の石突きにつけているU字型の器具に似ていたため。 昔、鋸の石突きを神が拾ったという伝説による。	秦 松浦	C	- ?
		オクケシ ^ハ シリ ^エ トク *オクケシ ^レ トク	op-kespe-sir-etu	槍端岬{ ? }	鋸の石突きに似た岩がある岬から名付けられた。 ペは語法上変である。	永田 山田		-
		オプケウシペツ	op-ke-us-pet	いつも槍を削った川 槍・を削る・いつもする・川	-	駅名 山田		-
		オプケシペ	{ op-kes-pe }	ホコ 鋸・末・所	この東西に岬があって、この形がアイヌが漁に用いる鋸の末にあるような入江だったため。 語尾に pe が付けられているのは語法上変である。 op-kes-un-pe(鋸の・末端・にある・もの)ぐらいの言葉が略されたものか。	上原 山田		?
7 オオタ 太田 (大成町)	地区	オオタ	{ ota }	{ 砂浜 }	この海岸が砂浜であったため。	上原	B	-
		モオタ	mo-ota	小浜 { 小さい・砂浜 }	-	永田		いずれにせよ、ota に関係した名と思われる。
8 オオタ 大滝 (大滝村)	村	-	-	-	村内の大滝(三階滝)にちなんだ名だという。もとの地名は徳舜警(トクシユン ^ハ ツ「トクシス ^ン ハ ^ツ tukusis-un-pet アメマス・いる・川」から伝わったと思われる)であった。 { 大滝村は徳舜警について、トクシ ^シ ウシ ^ハ ツ(アメマスの多い川)としている。正確には tukusis-us-pet (トクシ ^シ ウシ ^ハ ツ)の形と思われる。 }	山田	A	和名と思われる。
9 オオツ 大津 (豊頃町)	地区	オホウツナイ	oho-utnay	深き枝川 深い・枝川	十勝川支流の狭い川が数ヶ所で合流し大川となっていた。	上原 山田	C	-
		オオホツナイ	oohot-nay	深{ ? }・川	元来十勝川の分流だったので nay と呼んだが、今は本流よりも大きい。 { 昭和 38 年の十勝川河口部改修工事で、この大津川が十勝川になり、本来の十勝川は切り離されて、浦幌十勝川となっている。 }	永田		?

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				確定	コメント
10 オテ 大手 オテレコッペ (美深町)	地区	オテレケオッペ	o-terke-ot-pe	川尻・飛びはねる・いつもする ・もの(川)	二つ続く母音の一つを省いてオテレコッペと呼ばれた。川尻を飛び越えて渡った所であろう。川尻の辺を今大手というのはそれを省いた形の名であろうか。	山田	B	- いずれにせよ「飛び越えていた所」の意と思われる。
	川	*オテレコッペ	{ o-terkot-pe }	そこから・飛び越す・いつもする ・所	「いつもそこから対岸へ飛び越した所」の意味で、岸が両方からずっと寄ってきて、川幅が急に狭くなり、岸に岩などがあって対岸に飛び越すのに都合のいいような地形によくこの名が付く。	美深町史		-
11 オト 大榎 (小平町)	地区	ポロトコ	poro- ?	大きい・トコ	^{オオトドコ} 大榎を下略した半訳地名。トコについてはトウトウク(tu-tuk 岬・出っ張っている:上原)、トコ(上に沼ある:松浦)、トゥ・エトコ(tu-etoko 山・端:駅名)など諸説有り。	山田	C	? -
12 オヌ 大沼 (七飯町)	地区 駅 沼 温泉	ポロト	poro-to	大きい・沼	大小の沼が並んでいる場合、poro-to と pon-to(小さい・沼)と対照的に呼ぶ例は各地に見られる。	山田	A	
13 オノ 大野 (大野町)	町 駅	-	-	-	大野の名は古く元禄郷帳(元禄 13=1700 年)にも出ている。大きい野原という意味の和名であろう。	山田	A	和名と思われる。
14 オハコ 大函 (上川町)	地区	-	-	-	函は和人の言葉で川の両側が立っていて函のようになっている地形をいうが、測量者が案内のアイヌに聞いて書いたと思われる明治 31 年 5 万分図にも、シュオプ・ニセイ(suop-nisey 函の・絶壁)と書いてある。アイヌ語でも両側の崖が立っている地形を函と書いていたのだった。	山田	A	あるいはシュオプ・ニセイの意訳とも考えられるが。
15 オヒラ 大平 (島牧村)	川	オピラスマ	o-pira-suma	川尻の崖石		永田 山田	C	-
		ピラコアンペツ	pira-ko-an-pet	岸川 崖・に・ある・川	直訳崖のある川。			-
		オピラウシペツ	o-pira-us-pet	川尻に・崖・ある・川	あるいはこのようにも呼ばれていたものか。	山田		-
16 オホ 大鳳 (妹背牛町)	川	オオホナイ	ooho-nay	深い・川	川筋を歩いて見るとちっとも深くないので変だなと思って来たが、この辺は一带の水田地帯で、至る所で取水されていることが分かった。開拓されなかったアイヌ時代は深い川だったのではなかろうか。	山田	B	-
17 オカ 丘珠 (札幌市)	地区 川	オカイトムチャバ	okkay-tam-carpa	男の刀を落したる所{?}	-	永田	C	? -

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				備考	コメント
18 オキネウシ 置杵牛 (美瑛町)	地区 川	オシキナウシ *オシキナウシ	o-sikina-us-i	川尻に・ガマ・群生する・所	明治時代の地図にはオシキナウシと書かれている。	知里 山田	C	- いずれとも特定しがたい。
		オケネウシ *オケネウシ	o-kene-us-i	川尻に・ハンノキ・群生する ・もの(川)	上記説は置杵牛と音が少し離れているのが気になる。もしかしたら、左記のような別称があって、それが置杵牛となったのではなかろうか。	山田		-
		オキキンニウシ *オキキンニウシ	o-kikinni-us-i	川尻に・ウワミズザクラ ・群生する・もの(川)				-
19 オキキン 雄木禽 (美深町)	地区 川	オキキンニナイ	o-kikinni-nay	早咲接骨木の沢 川尻に・キキンニがある・川	ナイを略して今の川名となった。 {山田訳「キキンニがある」の「がある」は説明用に加えたものと思われる。}	永田 山田	B	- いずれにせよ、「キキンニがあった」ことが名の元と思われる。
		オキキンニウシ	{ o-kikinni-us -nay }	川尻に・エゾノウワミズザクラ ・多く生えている・川	この木は特別の臭いを発するので魔除けとして生活に欠かせないものであり、このためこの木の林がある所は特別に注意を呼んで地名となったもの。	美深町史		-
20 オキフシ 萩伏 (浦河町)	地区 駅	オニウシ	o-ni-us-i	木の生ず そこに・木が・立っている・所	三石、浦河の境だったため、双方のアイヌが境界に流木などを建てたことから名付けられたという。	上原 山田	B	- 他説もあり特定しがたい。
		*オニウシ		川尻に・木が・生えている ・もの(川)	一般的に o-ni-us-i なら左の訳であり、ここも元々はその意であったのが、後に上記説のように解されたのかもしれない。	山田		-
21 オクシハツ 奥薬別 (斜里町)	川	オクシウンペツ *オクスンペツ	o-kus-un-pet	川向こうにある川 {その尻・の向こう側・にある・川}	一番浜側にサクシペツがあり、その奥にマクシペツがあり、更にその川の彼方にこの川が流れていたものでそう名づけた。	知里	B	-
22 オクシ 奥尻 (奥尻町)	町 島	イクシタモシリ	{ i-kus-ta-mosir }	この向島 {その・向こう側・の・島}	イクシタを後略、モシリを前略したもので、熊石方面から見て向こうに当たるので名付けられた。	松浦	B	- いずれにせよ、「向島」の意と思われる。
		イクシウンシリ *イクスンシリ	{ i-kus-un-sir }	向島 {その・向こう側・にある・島}	-	永田		-
23 オクツナイ 奥津内 (八雲町)	川	オウコツナイ	o-u-kot-nay	合流川 川尻・互いに・くつつく・川	二つの川が海浜で合流していたため。 二つの川が並んで流れていて、砂浜の中で相接近して海に入っている。風雨の時、両川の川尻が砂浜で時に合流するので、この称で呼ばれた。 {オクツナイ川とポンオクツナイ川は、現在海岸で 50 m 離れている。しかし、江戸時代の地図では、海岸で接するように描かれているものもあるという。}	永田 山田	A	
24 オクイキ 奥行 (別海町)	地区	ウコイキウシ *ウコイキウシ	{ ukoyki-us-i }	争闘せし所 {けんかする・いつもする・所}	根室ポロモシリ村のアイヌが厚岸アイヌと戦った所だという。	永田	C	-

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				確定	コメント
25 オクリケ 送毛 (浜益村)	地区	オクリキナ	{?}	谷地草{?}	オクリキナという草があったためという。	松浦	C	?
		ウクルキナ	ukur-kina	サジオモダカ(植物) (タチギボオシ:知里)	その白茎を食べたという。	永田		-
26 オグルマ 小車 オグルマナイ (美深町)	地区 山岳 峠	オクルマッオマイ	o-kurmat-oma-i	和女居る所 川尻に・和人の女性が・いる・ もの(川)	-	永田 山田	B	- いずれにせよ「和人女性がいた」ことが名の元と思われる。
	川	オクルマッオマナイ	o-kurmat-oma-nay	川尻に・和人の女性が・いる・川	上記説の i は nai (川)でも呼ばれたのであろう。 地区名はオグルマナイを更に下略したもの。 {美深町史も語尾に「ナイ」を用いている。}	山田		-
27 オケト 置戸 (置戸町)	町 駅	オケトゥウンナイ	o-ketu-un-nay	川尻に・獣皮を乾かすその張り 枠・ある・川	明治30年の地図にはオケトゥウンナイと書いている。南の山から流れている緑川が昔オケトゥウンナイと呼ばれていて、それが下略されて置戸となったものであろう。	山田	B	-
28 オコタンペ (千歳市)	湖	オコタンウンペ *オコタヌンペ	o-kotan-un-pe	下村 川尻に・村・ある・もの(川)	昔アイヌが仮小屋を作って、温泉に入ったり魚を捕ったりした所。 知里氏は「家一軒しかなくても或る時期だけ仮住居するだけでも村(コタン)といった。」と書いた。正にそれに当たるものだったのだろう。 {千歳市史は「昔クッチャ(狩小屋)が5、6軒あったそうである。」と書いている。}	永田 山田	A	-
29 オウコッ 興津 (釧路市)	地区	オウコッ	o-u-kot	合川 川尻・互いに・くっつく	オウコッナイ、ポンオウコッナイという小川の川口が相寄っていて、合流はしていないが、大雨とか風波によって、時に浜で合流したりしたのでこの名があるのであろう。	永田 山田	B	-
30 オウコッ 興部 (興部町)	町 川	オウコッペ	o-u-kot-pe	川尻の合流する所 川尻・互いに・くっつく ・もの(川)	興部川と藻興部川が並流して町の西部を流れていて、その川尻は約4キロも離れているが、昔は砂丘の後を流れて合流してから海に注いだこともあって、この名が残ったのであろう。 {興部町史も同説。}	永田 山田	B	-
31 オサシマ 箆島 (音威子府村)	地区 駅	オタニコロナイ	{ota-nikor-nay}	細い砂浜を通っている川 {砂・の中・川}	オサニコロナイ即ちオタニコル・ナイと、ピラケシマナイ即ちピラ・ケシ・オマ・ナイとの両地名の混成形であると思われる。 {音威子府村史は「新線駅名改称具申文書によると、土地の名称の物満内の予定であったが、3文字は事務上煩雑なので、箆島駅としたとある。箆島はオタニコロナイ オタニコロナイ オサニコロナイ オサシマンナイとなり、オサシマに漢字の箆島を当てて駅名とした」とある。}	駅名	C	?
		ピラケシオマナイ	{pira-kes-oma-nay}	崖・の端・にある・川				

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				備考	コメント
32 オサチナイ 長知内 (平取町)	地区	オサツナイ	o-sat-nay	川尻・乾く・川	この川は乾期になると流水がなくなって、川底が乾くのでその名があった。 {川口から沙流川までの間は砂礫原になっているので、水が全て潜ってなくなるという。}	山田	A	
33 オサツ 長都 (千歳市)	地区 川	オサツナイ	o-sat -nay	涸れ川尻 川尻・乾く(・川)	この川は夏になると沼に注ぐ所が乾くため。 今は夏でも乾かないという。昔とは地形が変わっているようである。 {千歳市史には「小沼に注ぐ入口手前が砂で埋まったことがあるという」と書かれている。}	永田 山田	A	
34 オサツナイ 於札内 (浦臼町)	地区 川 駅	オサツナイ	o-sat-nay	川尻・乾く・川	砂利川で、乾期になると川尻に近い辺で、水が砂利の下にしみ込んでしまって、川底が乾くのでこの称で呼ばれた。 ----- 沢を流れ出る川が石狩川に注ぐ頃には川幅が広くなり、川尻が乾いた状態になっていたため。	山田 浦臼町史	A	
35 オサツハ 尾札部 (南茅部町)	地区 川	オサツペ	o-sat-pe	川尻・乾く・もの(川)	土地で聞くとこの川の水はいつでも流れているという。ただし、砂利川であり、乾水期に水がしみ込んで乾いた所が広がり、この称があったのだろうか。	山田	B	-
36 オサムナイ 納内 (深川市)	地区 駅	オサナンケッ	o-sa-nanke-p	川尻にてヨシを茹る所{?}	サ{sa}はサラ{sar}の略言。	永田	C	? - -
		オサラウンナイ *オサルンナイ	{o-sar-un-nay}	川尻に・ヨシ原・のある・川	今では伝承が残っていないので何ともいえない名である。	駅名 山田		
37 オサラッペ (鷹栖町)	川	オサラッペ	o-saratpe {?}	女神玉門を出したる所{?}	たぶん明治のころの土地の伝説と思われる。	永田 山田	C	? - - -
		オサラペッ	o-sar-pet	川尻・ヨシ原・川	土地の音が昔からオサラッペな点が気になる。	知里 山田		
		オサラベッ	o-sara-pet	陰所を・出している・川	近文の古老は、脚を開いて陰所を出すことをオサラという。この川尻が開いているので、こう呼んだのかもしいと語った。	山田		
38 オサル 長流 (伊達市)	川	オサレペッ	osare-pet	投げる・川{?}	急流の意味。ここのアイヌは「投げる」をオサレともオスラ{osura}とも言う。	永田	B	? - - - いずれにせよ、「ヨシ原があった」ことが名の元と思われる。
		オサラペッ	o-sar-pet	川尻に・ヨシ原(がある)・川	長流と当て字して川名、地名として使われてきたが、「お猿」と聞こえるのが困らしくて、近年長和と改名された。(山田)	山田		
		オサラウンペッ *オサルンペッ	o-sar-un-pet	川尻に・ヨシ原・ある・川	{明治35年図には7個くらい中州が書かれているという。昔からヨシ原の広がっていた川尻と思われる。}	駅名		

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考		
		カナ表記	ローマ字表記				確定性	コメント	
39 オサルシナイ 長流枝内 (音更町)	川	オサヲウシナイ *オサルシナイ	o-sar-us-nay	川尻に・ヨシ原・ある(ついでに) ・川	-	山田	B	-	
40 オサルナイ 長留内 (幌加内町)	地区 川 山岳	オサヲウンナイ *オサルンナイ	o-sar-un-nay	川尻に・ヨシ原・ある・川	川尻は低湿地で今でもヨシが生えていて、鴨撃ちの人などが来るのだそうである。	山田	A		
41 オシコト 押琴 (厚田村)	地区	オソロコツ	osor-kot	尻・くぼみ	海岸に山の崩れた跡があり、尻の形状であったため。 文化神が尻餅をついた跡という所は道内各地に残って地名化している。 {バス停「押琴」の道路から海岸に向かって直径 200 m 程の 3/4 円形の緩やかな窪地があるという。}	上原 山田	A	上原解の方が自然な形と思われる。	
		ウブソロコツ	upsor-kot	マ フコロ 懐・くぼみ	マ 潤が物の懐のようにくぼんでいる様子をいったもの。	松浦 山田			-
42 オシトマリ 鷺泊 (利尻富士町)	地区	ウシトマリ	us-tomari	入江の・泊地	利尻島北部の舟着場の地名。天保 5 年(1834 年)測量の今井八九郎図では、ちょうどそこにウシトマリと書かれてある。	山田	A		
43 オシャマッポ 老者舞 (釧路町)	地区	オイチャンオマブ	o-ican-oma-p	川尻に・鮭鱒産卵場・ある ・もの(川)	形だけからだとこうとも聞こえるが、訛った形らしいので、うっかり解がつけられない。	山田	C	-	
44 オシャマンベ 長万部 (長万部町)	町 川 駅 山岳 温泉	ウパシサマムペ	{ upas-samampe }	雪・ひらめ {雪・カレイ類の魚}	「昔、神がこの海で大ヒラメを釣り、神として山上に祭らせた。春雪解けの時に、この山にヒラメの形の雪が残るときが漁期だと教えられた。」という伝承による。	秦	C	諸説あり特定しがたい。	
		オサマムペツ	{ o-samam-pet }	川尻・横になっている・川	川尻が海と並行している川なので、そう考えられたのだろう。	駅名 山田			-
		オサマムペ	{ o-samampe }	川尻・カレイ類の魚	カレイのたくさんとれる河口という意味。	長万部町HP			-
45 オショッブ 押帯 (本別町)	地区 川	オスウオブ	o-suwop	川尻・箱	永田氏は「supo 箱川」としたが、それだったら左記の形だろう。他地で suop といえば両岸が切り立って箱の感じのする峡谷であるが、この川尻は平坦地で、どうもその感じではない。もっと小さい箱形の何かがあったのだろうか。	山田	C	-	

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				備考	コメント
46 オシロ 忍路 (小樽市)	地区	ウシオロ *ウソロ	us-or	入江 入江の中	-	上原 山田	C	- いずれも入江、湾を意味すると思われ るが、語源に諸説あり特定しがたい。 - ? -
		ウフソロ	upsor	ふところ 女陰{?}	湾の形が懐のようだったため。 -	松浦 知里		
		オソロ	{osor}	尻	元来は尻の意味だが、湾のことをこう呼んだ。	永田		
47 オシラハツ 音調津 (広尾町)	地区 川	オシラウンベツ *オシラルンベツ	o-sirar-un-pet	磯多き所 川尻に・岩・ある・川	今でも漁港のテトラポッドの下は岩礁だし、それから南は海難があって恐れられていた大岩礁だとのことであった。あるいは un を省いた形から残った名であろう。	永田 山田	A	
48 オシライカ 尾白利加 (新十津川町)	川	オシライカ *オシラリカ	o-sirar-ika	岩川 そこで(川尻)・岩を・越す(川)	川尻に岩があって、その上を流れるという意味。 川口から 4 キロ余溯ると、川が岩盤の上を横切り、その上を白波を立てて流れていた。これから上は岩盤の所が多いのだという。長い川なので、o が「川尻」か、「そこで」という意味であったのかよく分からない。	永田 山田	B	-
49 オシロナイ 尾白内 (森町)	地区 川 駅	オシラナイ	o-sirar-nay	川尻・岩・川	sirar は従来「潮」とも訳され、潮の入る川と考えられてきたが、「岩」の意味だけで「潮」の意味はないとする知里氏の説によると、こう考えるしかない。川尻には岩の姿が見えないが、土地の人に聞くと川尻の海中にちょっとした岩があったという。	山田	B	-
50 オシンコシン (斜里町)	滝	オスルクウシイ *オスルクウシ	o-sunku-us-i	川尻に・エゾマツ・群生している もの(川)	明治 30 年 5 万分図では、岬の東のたもとに近い所にオシュクウシという小川が書かれている。それがこの辺一帯の地名となって、滝の名にも使われたのであろう。	山田	A	
51 オソキナイ 晩生内 (浦臼町)	地区 川 駅	オソキナイ オソッキナイ	o-soki {?}-nay o-sotki-nay	川尻の高崖出たる所{?} 川尻・寝台・川	たぶんアイヌ古老の説だったのであろう。	永田 山田	C	? - -
		オソッケナイ	o-soske-nay	川尻が崩れている谷川 川尻・剥げている・川	-	駅名 山田		
52 オタノシキ 大楽毛 (釧路市)	地区 駅	オタノシキ	ota-noski	砂浜・の中央	釧路から西の白糠地域にかけては砂浜の続きで、ここはその中ほどの所なので、こう呼ばれた。	山田	A	
53 オタモイ (小樽市)	地区	オタモイ	ota-moy	砂浜の・入江	地藏堂の岩崖の下の入江の所が、現在小さな砂利浜になっているが、そこがこの地名でいうオタであったのだろう。	山田	A	

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				確定	コメント
54 オタル小樽 (小樽市)	市川駅峠	オタルナイ	ota-ru-nay	砂の解ける小川 砂・融ける・川	この川は、常に砂が解けて流れていたため。	上原山田	C	- 諸説あり特定しがたい。
				砂路川 砂浜の・路(の所の)・川	{かつての街道が川尻の所を通過していたという。}	松浦山田		-
		オタナイ	ota-nay	砂・川	-	永田		-
		オタオロナイ *オタオンナイ	ota-or-nay ota-on-nay	砂浜の中の川 砂浜・の所の・川	他地所々に ota-or-pet があるので、この解は興味がもたれるが、続けて呼べばオタオンナイとなり、元禄郷帳の昔からのオタルナイを考えると、少々考えてみたくなる点がある。なお、名のもとになった小樽内川の川口は銭函の東、今は新川川口となっている所であり、古くはアイヌのコタンがあって、和人もそこで漁場を開いていたものらしい。後に運上屋を今の市街地内に移し、旧地の名をそのまま使って小樽内場所と称していたが、後に下略して小樽と呼ぶようになった。	駅名山田		-
55 オイトウ尾岱沼 (別海町)	地区沼	オタエトゥ	ota-etu	砂・岬	野付湾に突き出した市街地の所がこの名の発祥地であるが、この辺一帯の地名となったようである。ota-etu が「おたいと」と訛り、それに尾岱沼と当て字された。この付近では沼と書いて「とう」と読ませている地名が他にもある。アイヌ語のト(to 沼)がこの辺の和人の間でも日常語として使われていて、トという音に沼と当て字されたものらしい。	永田山田	A	
56 オアイ落合 (南富良野町)	地区川山岳	-	-	-	空知川本流とルウオマンソラプチ川がここで落ち合い(合流し)、向きを変えてここから西流する。それで落合の名になった。 {南富良野町史も同説を書き、さらに「明治 34 年に駅名として初めて登場し、市街地名、原野名として使われ、広域の字名としても使われるに至った。」と書いている。}	山田	A	和名と思われる。
57 オチャラッペ (今金町)	川	オイチャンウンペ *オイチャヌンペ	o-ican-un-pe	川尻に・鮭鱒の産卵場・ある・もの(川)	オチャラッペも産卵場の川の少し訛った形らしく、オイチャヌンペの別称だったのではなからうか。	山田	B	-
58 オチュウヘ乙忠部 (枝幸町)	地区川	オキトウンペツ	o-kito-un-pet	葎多き川 {川尻に・ギョウジャンニク・ある・川}	ギョウジャンニクが極めて多いところだった。	永田	C	- 諸説あり特定しがたい。
		オチシウンペ *オチスンペ	{ o-cis-un-pe }	川尻に・高岩・ある・もの(川)	-	山田		-
		オクチシウンペ	{ okcis-un-pe }	峠の凹み・ある・所	-			-

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				備考	コメント
59 オィネッ 音威子府 (音威子府村)	村 川 駅	オトイネッ	o-toyne-p	川口のにごっている川	こうした濁り川にイトウが入るので、名付けられた。	駅名 山田	B	-
				川尻(を歩くと)・泥んこである ・もの(川)	川尻を眺めてもそう濁っているように見えない。川底は泥らしいので、そうかなと思ったが自信はない。			
60 オィ 音江 (深川市)	地区	オトゥイエポク	o-tuye-pok	川尻の潰れる山下 {川尻・切る・ふもと}	この川は山から流れてきていて、川尻が所々へ切れて いたため。	永田	C	?
	川 山岳	オトゥイ(ウシ)ナイ *オトゥユシナイ	o-tuy-(us)-nay	川尻・切れる・(いつもする)・川	旧図では、現在の音江川の東の山の下を流れている小 川をオトゥエポクとしており、これが名のもらしい。もしか したら o-tuy がその山名にも使われていて、その下の所 の意でもあったか、どうも分からない名である。	山田		
61 オシハ 音標 (枝幸町)	地区	オチシペッ	o-cis-pet	川尻の凹みたる川 {川尻・くぼんだ・川}	川尻がくぼんでいるため、雨後は深くなり流れなくな った。	永田	B	- 諸説あり特定しがたい。
	川 岬	オチシウンペ *オチスンペ	o-cis-un-pe	川尻に・くぼみ・ある・ もの(川)	永田氏の書いた形か、あるいは左記ぐらいの形からオチ シペ 音標と訛ったとでも見るべきか。	山田		
		オチウウシペ	o-ciw-us-pe	川尻に・波・ある・もの(川)	音だけならこうも読めるが、行って見るとそんな姿には見 えない。			
62 オシハ 落部 (八雲町)	地区	オテシペッ	o-tes-pet	川尻に魚笥を掛ける所 川尻・築・川	{八雲町も同見解。}	永田 山田	B	- いずれにせよ「テシがあった」 ことが名の元と思われる。
	川 駅	オテシウンペッ *オテスンペッ	{ o-tes-un-pet }	川尻に・ ^{ヤナ} 築・のある・川	-	駅名		
63 オトフケ 音更 (音更町)	町 川 山岳	オトフケ	{ otop-ke ? }	毛髪生ず 頭髮・の所 { ? }	未詳。 「駅名の起源」昭和 25 年版はその語を書き「広い川原 に柳が毛のように密生しているからだ」と説明した が、同 29 年版はその説は疑わしいとだけ書いた。	永田 山田	C	? -
64 オトハ 乙部 (乙部町)	町 山岳 温泉	オトベ	{ o-to-pe }	川尻に沼ある川 {川尻・沼・もの(川)}	-pe は語法上名詞には付かない。	永田 山田	A	? - 「o-to-un-pe」説が妥当と思わ れる。
		オトウンペ	o-to-un-pe	川尻に・沼が・ある・もの(川)	現在は沼がないが、土地の人に聞くと昔は沼であった が、新川を通して整地し、水田にしているという。	上原 乙部町HP 山田		
65 オニシカ 鬼鹿 (小平町)	地区	オニシカ	{ o-nis-ka ? }	雲の上にある{ ? }	昔、ここに雷が落ち雲とともに上ったため。	上原	C	? - ? -
	山岳	オニウシカペッ	{ o-ni-us-ka-pet ? }	森林の中を流れている川{ ? }	あるいは、オニウシ・カ(森・の上)という地名があったの でもあろうか。	駅名 山田		

